

読書推進運動



公益社団法人
読書推進運動協議会

〒101-0051
東京都千代田区神田神保町1-32
出版クラブビル6階
TEL 03(5244)5270
FAX 03(5244)5271

発行人 小塚 昌弘
編集人 片岡 伸子

定価 60円
会員の購読料は
会費の中に含まれる

No.646

★「読書週間」ポスターデザイン決定！(2頁)

★野間読書推進賞 受賞者の活動報告(5頁)



贅沢な「旅」は読書環境から

「読書週間」によせて

公益社団法人読書推進運動協議会 常務理事
株式会社原書房代表取締役社長

なるせまさ
と
成瀬雅人

長引くコロナ禍は、日々の暮らした仕事に多くの変化をもたらしました。

会合が減り宴席がなくなつて浮いた私の時間の多くは、読書に向けられました。

出版に携わるようになって時間が経つにつれ、読みたい本より読まなければならぬ本の割合が増えて溜まったラストレションの解消に努めたという感じでしょうか。

まず手にしたのが、塩野七生さんの『ローマ人の物語』。単行本刊行時に読み始めて挫折した長編小説は、文庫本で43巻になります。読み進めるうち、これを読まずに西洋史の本を出版してきた自分が恥ずかしくなりました。

読後は周辺知識の裏付けがほしくなり、今度は専門書

に手を伸ばします。ここでは自社で過去に出版した本にお世話になりました。

西洋史のつぎは日本史。大河ドラマにあわせ、戦国時代と幕末を描いた、司馬遼太郎さん、吉村昭さんや池波正太郎さんの小説をむさぼるよう

に読み漁りました。合間には、最新学説を求めて学術書も。さらに、ゆい森あらかわ内の吉村昭記念文学館、台東区立中央図書館内の池波正太郎記念文庫に足を運ぶと、以前行つたときには気づかなかつた発見がありました。

フィクションとノンフィクションの世界を行ったり来たりしながら漂う過去への旅は時空を超えた贅沢なもので、コロナのおかげでとは言いたくはないですが、豊かな時間

を過ごすことができました。その豊かさ、すばらしさを伝えるためにも、読み継がれる良書を世に送りつづけなければと決意した次第です。

私事ですが、この1年で身の回りに起きたもうひとつの大きな変化は、初孫が生まれることです。それをきっかけに、しばらく遠ざかっていた絵本や児童文学の世界に目を向けることになりました。

孫のために選ぶと読み始めた絵本や児童文学に、気がつくとも自分自身がひきこまれてゆきます。ロングセラーの多い児童書の世界には何世代にもわたり生き残る良書が多いことや、絵本が子どもたちだけのものではなく、大人になっても別の読み方ができる奥深いものだと言われること

が、実感できる日々です。絵本や児童文学に関心が向くと、書店や図書館を見る目も変わってきます。失礼ながら、いままで自分の会社の出版物の有無を物差しに見がちだったのが一変します。子どもの本をならべるまちの小さな書店や図書館が地域ではたしている役割が、あらためて見えてきました。

その、まちの小さな書店がどんどん消えています。私が暮らす都内私鉄沿線の駅周辺に4軒あつたまちの書店はいま1軒だけ。孫の手をひいて散歩がてら絵本を選びにゆく日を実現させたいものです。

無書店地域が増えると、地域の図書館の役割は大きくなります。子どもたちに、より多くの本の中から自分のお気に入りの本を選ぶ楽しみを味わってもらうためには、資料費の充実が必要です。

読書環境を守るために、私たちにできることはたくさんあるはず。あきらめずに取り組んでゆきましょう。



最後の頁を閉じた 違う私が出た

2021・第75回 読書週間

10/27 ~ 11/9



ポスター完成しました！

図書館・書店・学校など、掲出にご協力ください

「2021 第75回・読書週間」のポスターが完成、9月中旬より順次、発送してまいります。

標語・イラスト募集に応募いただいた方、選考委員、デザインを担当したプラス・アイなど、すべての関係者に感謝いたします。

ポスターは6万2千枚を製作、全国の小・中・高校、公共図書館、

書店などに配布、掲出をお願いいたします。出版社、新聞社、テレビ局などのマスコミ関係機関にも、「読書週間」趣旨書と運動普及活動の要請書を同封し送付する予定です。

今年の標語は、「最後の頁を閉じた 違う私が出た」です。入選者の緑川良子さん（講談社）からは、「没頭できる本に出会うと、

読み終えてもすぐに現世に戻れません。しばらく宙に浮いたような感覚のあと、われに返っても、読む前とは確実になにかが変わっています。そんな出会いをいつも楽しみにしています」と、作者のこ

とばをいただきました。ポスターイラストは、しらいたまもさんの作品。「夢中で本を読み進め、最後の頁を閉じるころ。それまでとは違う考えをもつようになつたり、もの見方をしたりするようになった経験はありませんか？ そんな、世界をひろげる本との出会いがありますように」と、イラストにこめた思いを紹介してくれました。男性がひとり、大きく描かれた構図は、「読書週間」のポスターではめずらしく、いつもとは「違う」感じがしませんか？

図書館スタッフ、書店員のみさんの「人生これで変わった本」、読み聞かせをしているうちに「子どもたちの表情がみるみる変わっ

ていった本」、登場人物が大きく成長していく本、「違う私」の解釈を広げて「自分や世界が変わってしまう」怪奇・ホラー小説など、標語にちなんだ特集のご報告をお待ちしております。

本年度も、日本雑誌協会の特別なご協力をいただき、多くの出版社の雑誌に告知広告掲載のお願いをしました。電通の協力で新聞各紙やテレビ・ラジオの情報番組でも取りあげてもらおうよう、努めています。

読書推進運動協議会ホームページ (<http://www.dokusyo.or.jp>) では、ポスター・マークのデータ、このページにも使っているロゴデータ（各種フォントあり）のほか、図書館、書店での展示に活用いただけるポップ、しおり、ブックカバーのPDFデータを配布しています。

比較的落ち着いていた今春の「こどもの読書週間」時とくらべ、現在は新型コロナウイルス感染症変異株の増加や、一部地域での病床逼迫など、また厳しい状況となっております。閉塞感ただよう状況ではありますが、読書で広がる世界に制限はありません。本を読んで変わる楽しみを存分に味わう週間となりますように。



・イラストレーション／しらいたまも
・標語／緑川良子
・デザイン／有原文絵（プラス・アイ）

■第54回 造本装幀コンクール

2年分の新刊書籍461点より 24の入賞作品決まる

「出版・デザイン・印刷・製本産

業の向上発展」を目的とした「第54回 造本装幀コンクール」(主催 日本書籍出版協会/日本印刷産業連合会)の表彰式は、9月7日(火)に東京都千代田区の日比谷図書文化館で開催の予定だったが、新型コロナウイルス感染症対応のため、中止となった。

その代わりとして、公式ホームページで受賞者コメントや作品紹介動画などの公開を準備中。また受賞作品は9月22日から11月末にかけて、東京都千代田区の出版クラブビル3Fライブラリーにて展



今回の三賞受賞作。左より産業経済大臣賞、文部科学大臣賞、東京都知事賞

示される。

「第54回 造本装幀コンクール」は昨年、新型コロナウイルス流行の影響で募集・審査を延期。2019・2020年発行の書籍2年分を対象として、去る6月7日・8日に審査会が行われ、181者・461点の候補作の中から、「文部科学大臣賞」「産業経済大臣賞」「東京都知事賞」の三賞をはじめとする10賞24作品の入賞が決定していた。

【第54回 造本装幀コンクール】

三賞受賞作

●文部科学大臣賞

『花森安治遺集(全三巻)』

(暮しの手帖社)

装幀 佐々木暁

印刷 製本 函書印刷

●産業経済大臣賞

『Arts and Media volume 10』

(大阪大学大学院文学研究科 文化動態論専攻 アート・メディア論研究室)

装幀 松本久木

印刷 山エムカラー

製本 山エムカラー

藤原製本



当協議会賞の表紙レコードは入っていません!

●東京都知事賞

『forward』

(skybluebooks)

装幀 久能真理

印刷 山エムカラー

製本 篠原紙工

なお、読書推進運動協議会が選定する「読書推進運動協議会賞」は、今回は茂村巨利(なおとし)さん装幀の『ジャケ買いしてしまっただった!!』(シンコーミュージックエンターテイメント)が受賞した。印刷・製本は共立アイコム。

同作品は往年の12インチシングルの黒い「がんだれ(小口折り)表紙」に丸い穴をあけ、長い折り返しの裏に印刷されたセンターレーベルを覗かせて、本当にレコードが入っているように見える。文字通り購買動機につながる、装幀の魅力を感じさせる一冊となっている。

■絵本ワールドinふくしま

福島県で2年ぶりに 絵本ワールド開催!

8月14日(土)・15日(日)、福島県郡山市のミュージカルがくと館で「絵本ワールドinふくしま2021」

(主催)「絵本ワールドinふくしま」実行委員会)が開かれた。昨年は新型コロナウイルス感染症流行のため中止となったが、今回は感染症対策に万全を期しての開催。両日とも来場は事前予約制で、計4回行われた講演会は、最大120名まで。同じく計6回行われたミニブック製作のワークショップは各回10組(1組4名まで)限定となった。また入場にあたっては検温と消毒、マスク着用が義務

付けられた。

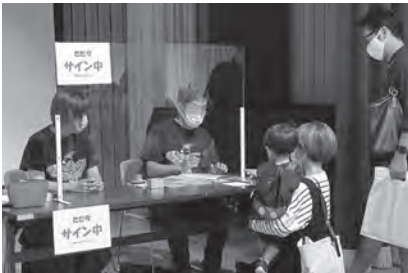
さらに今回は併催の子どもの本大展示会も行われず、全体に手作り感あふれる、家族的な雰囲気の内覧イベントとなった。

14日はオープニングセレモニーに続き、午前中は恐竜図鑑で知られるヒサクニヒコさんの講演会。恐竜について調べ始めたきっかけや、「鬼」「カッパ」「天狗」「忍者」など消えてしまったもの、正体わからないものに興味をもって創作を続けてきたことなどを語った。

午後は『恐竜の迷路』などの迷路絵本で人気の香川元太郎・志織さん親娘と参加者が、実際の作品を使って迷路遊びを楽しんだ。

15日は、午前はイラストレーター福田利之さんとイラストレーター・ライターのユニット「みず文庫」さん、午後は『うしとぎん』などの絵本作家・高島那生さんが講演した。

また両日とも、講演会の合間には洪沢やこさんの「布の紙芝居」、絵本専門士ゆうくんの「おはなし会」も行われた。



密を避けて行われた、香川元太郎さんのサイン会

「秋の読者還元祭」実施へ

当選本数も倍増！ スマホで使える 図書カードプレゼントキャンペーン

日本書店商業組合連合会(日書連)は、「読書週間」初日の10月27日(水)から11月11日(木)まで、「秋の読者還元祭 2021」を全国の書店(還元祭実施書店のみ)で開催する。

この「還元祭」は、昨年まで春と秋に日書連が実施していた「書店くじ」を引きついで日書連が企画。今年の春に「春の読者還元祭」を実施し、読者・参加書店双方から好評を得ている。

「還元祭」2回目となる今回は、春同様実施書店が書籍・雑誌を購入した読者に、キャンペーンサイトのQRコードが入ったしおりを進呈、読者はキャンペーンサイトにアクセスし、必要事項を記載して応募する。抽選で5000名に図書カードネットギフト1000円分が当たる。



店頭ポスターと配布しおり

「図書カードネットギフト」は、スマートフォンで使える図書カードで、応募から受け取り、書店での使用まで、スマートフォンで完結できる。

今回は11月1日「本の日」図書カードプレゼントキャンペーンと一本化し、当選本数が倍増。また、ダブルチャンスとして、「ギフトブック・キャンペーン(主催)文化通信社」への応募もできる。

「秋の読者還元祭」実施書店名など、詳細は日書連、または「本の日」ホームページを参照のこと。実施書店には9月中旬以降、告知ポスターが掲出される予定。
●日書連ホームページ
<https://www.n-shoten.jp/>
●「本の日」ホームページ
<https://honohi.com/>

第107回 全国図書館大会 山梨大会 開催へ

「交ひの国」から 新しい図書館文化を発信!

公益社団法人 日本図書館協会と山梨県ほかが主催する「第107回 全国図書館大会 山梨大会」が11月11日(木)・12日(金)に開催される。今年も昨年の和歌山大会に続き、オンライン形式となる。

今回のテーマは「知をつなぐ、甲斐(交ひ)の国から」。「甲斐の国」交ひの国「山梨より、オンライン」という新たな交流の形で人と情報、人と人を結ぶ図書館の可能性を広げる大会を目指す。

11日から配信される全体会は日本図書館協会理事長の植松貞夫さんの基調報告と、集英社社長の堀内丸恵さんと山梨県立図書館館長の金田一秀穂さんによる記念講演「対談「これからの出版と図書館」」

16の分科会是一部を除き、11月上旬から12月まで配信される。各テーマは次のとおり。
第1分科会 公共図書館
「地域社会における公共図書館の存在意義」
第2分科会 大学図書館
「新型コロナウイルス感染症拡大と大学図書館」

「情報リテラシー教育の次世代モデルに向けて(仮題)」

第11分科会 障害者サービス
①「利用者にとってアクセシブルな電子書籍とは」
②「読書バリアフリー法における各図書館の役割」

第12分科会 資料保存
「やってみよう!資料保存II—資料保存の疑問解決!—(仮)」
第13分科会 出版流通
「コロナ禍における情報利用行動と図書館」

第14分科会 多文化サービス
「多文化サービスQ&Aを使って一歩前進」
第15分科会 健康情報
「認知症と図書館のバリアフリー」
第16分科会 非正規雇用職員
「会計年度任用職員—職場はどう変わったのか—」

参加費は4000円(視聴費、大会記録誌など含む)。参加申込(10月7日(木)締め切り)は、大会ホームページより受けつけている。ホームページでは大会情報の更新のほか、交流サイトの開設も予定されている。

●第107回 全国図書館大会
ホームページ
<https://www.lib.pref.yamanashi.jp/107th-taikai/>

■野間読書推進賞 受賞者の活動報告

開かずの扉と孫たちがくれた新しい発見 ——コロナ禍の一年を振りかえる

(出) 沖繩県子どもの本研究会 平田恵美子



小学生から届いた感想文を読む
平田さん

2018年ごろから、作家の上條さなえ先生のご指導を受け、私の幼いころの思い出を書きはじめた。それが2020年4月20日、合同出版(株)から出版された。タイトルは『ばあばがえみーだったころ やんばんるのいなぐんぐわ』。4月から6月に500冊を身近な人、市内公共図書館、小学校へ寄贈と、なんと目まぐるしかったことが。小学校6年生から届いた感想文には「戦争のことや当時の遊びや伝統行事に興味をもった。戦争時代に生きてきたえみーは、たくまし

いと思います」と記してあった。そんななか、コロナの状況はたいへん深刻になっていた。これまでに市内の繁多川図書館でブックスタートのフォローアップとして行っていた「びよびよおはなし会」は開催されず、ボランティアの私は出番がなくなっていた。孫が通っている小学校の読み聞かせボランティアも、コロナウイルス感染症への影響で活動が中止になった。これまで教室で出会った子どもたちの元気な声、輝く瞳。2年生のクラスでは「1年生のときにも、お話ししてくれたよねとか、孫のクラスで読み聞かせをしたことを覚えていて、「いつちゃんのおばあちゃんだよ」と校外でも声をかけてきた子どもたち。そういうふれあいがなくなり、とても寂しい。マスク着用を余儀なくされた子どもたちを見ると心が痛い。「コロナに負けない!」と叫びたくなる。ボランティアの場がなくなっていたことで、これまで外に向けていた読書への関心を、内に向けてみた。

いつかきつと読もうと思ひ、大切にしていた開かずの扉(書架)を開くと、82歳になる私にびつたりの本「伝えたいもの、伝わるもの 絵本・児童文学における老人像」(宮地敏子著 グランマ社)を見つけた。その中でいちばん印象に残ったのが、『アニーとおばあちゃん』(ミスカ・マイルズ作/ピーター・パーノール絵/北面ジョーンズ和子訳 あすなろ書房)。ナバホ・インディアン少女アニーは毎晩おばあちゃんが語る昔話が大好き。ある日、おばあちゃんは自分の死が近づいていることを家族に告げる。アニーは最初は恐れるが、「お日様は、朝大地からのぼり、夕方、大地に生ずんでいく。生きているものはすべて、大地から生まれて、大地へ帰っていくんだよ」とおばあちゃんに諭され、死を理解していく。このことばの力に感動した。私は子や孫たちにどんなことばで自分の死を伝えられるか、課題である。わが家の日常生活にいちばん近

い絵本『だじょうぶ だじょうぶ』(いとうひろし作・絵講談社)。7人家族で暮らしているが、1階はじじ・ばば、2階に息子が家族が住んでいる。下でだれかが咳きこんだり、もの落ちる音がすると、上から孫が「だじょうぶ?」と声をかける。下から「だじょうぶ だじょうぶ」と答える。『だじょうぶ だじょうぶ』をいちばん下の孫娘に読み聞かせすると、近くにいた仲よしのじいじに「じいじ、としとらないでね」とやさしく声をかけてくれる。文中の「ぼくは、ずいぶんおおきくなりました。おじいちゃんはずいぶんとしをとりました」という意味をしっかりと理解していたんだね、と、感心した。さらに、『ぼくは川のように話す』(ジョーダン・スコット文/シドニー・スマイス絵/原田勝訳 偕成社)を孫と読む。「ぼく」の学校では、毎朝ひとりで好きな場所について話す。でも「ぼく」はどもつて口が動かない。その日の放課後、お父さんが「ぼく」を川へ連れていき、なめらかではな急流を指して、お前は川の流れのように話しているんだという。つぎに「ぼく」がいちばん好きな場所を話す日の場面で話を止め

て、孫に「ぼく」がなにを話すと思う?」と聞くと、ページ前に戻し「川のことを話す」と、きっぱりと言った。本は前に進めたり、戻したりするよさがあることを、あらためて孫に教えられた。孫3人と楽しく読んだのは、『おへそがえる こん(全3巻)』(赤羽末吉著 福真館書店)。2番目の孫が第一声「マンガみたい」というのでページをめくると、テンポが速く、なるほどマンガの作風を取り入れ、正義感にあふれている。「おもしろい、おもしろい」と身を乗り出し、楽しく読みあつた。コロナの影響で図書館で本が借りづらくなったいま、家庭でどれだけ読書が楽しめるか。子どもたちの知る喜び、読む喜びを自由に選択できる日常を取り戻したい。



平田さん所蔵の「絵本・児童文学における老人像」には、書き込み・付箋もあちこちに

優良読書グループの歩み (9)

2020年度の「読書週間」に際して道府県読書推進運動協議会より推薦され、本会において表彰した全国の優良読書グループの活動報告を掲載いたします。
(順不同)

おはなし会キャロット

代表者 芳賀 牧子

福島県東白川郡棚倉町

〈推薦〉
福島県読書推進運動協議会

「おはなし会キャロット」は、1996年4月から活動をはじめました。以前は、「おはなし会ラビット」の名前で活動していたのですが、「ラビット図書館」という子ども図書館ができたため、名前の変更をお願いされ、うさぎの好きなもののひとつである、キャロットとして活動を再開しました。

最初はラビット図書館での月1回のおはなし会からのスタートでした。会員も子ども同伴でおはなし会に参加してくれました。昔話の大型紙芝居を作成したり、舞台のぬいぐるみ劇などをしていました。

現在は、町立図書館で年5回の

おはなし会、各小学校からの依頼を受けたり、子ども教室の開級式

のおはなし会、保健センターでのブックスタート、幼稚園の夕すずみ会での親子おはなし会、おひさまクラブ、乳幼児の親子が対象のすくすくルームのおはなし会と、年20回以上のおはなし会をしています。

大型絵本、大型紙芝居、とびだす絵本、エプロンシアター、ペーパーサート、手あそび、手づくりしかけ絵本などでおはなし会をしています。公園などでの依頼のときは、自転車に載せた紙芝居を読んだり、大型絵本を読んだりしています。乳幼児が対象のときは、親子でふれあいがらや布の絵本でおはなししてみたりと、小道具なども本を参考にいろいろと作っています。「ふしぎな家」は、動物をアンパンマンの仲間に入れ替えたのですが、幼児から小学生まで喜んでくれました。

会員も仕事を持っている人たちがばかりなので、休日出られる人や、

平日しか出られない人と、全員が集まることは、とても困難です。LINEやメールなどで連絡を取りあうこともあります。おはなしの会の内容向上のため、近くで絵本作家さんの講演などがあるときは、受講しています。

私たちのおはなし会は、親子が楽しんでくれるようなおはなし会を望んでいます。おはなし会のおまけに簡単な手品をしたりして、最後まで楽しんでもらえたらと思っています。そして、ひとりでも多くの人に本を好きになつてもらえるように、ひとりでも多くの人に本をもつと身近に感じてもらえたらと思っています。



町内多くの施設で大人も子どもも楽しむおはなし会を

悠遊読書会

代表者 杉森 憲一

埼玉県春日部市

〈推薦〉
埼玉県読書推進運動協議会

私たち、悠遊読書会は、元気な本好き7名の本を介したおしゃべり会です。毎月、第2木曜日午後1時半から3時半まで、共通図書センターに、庄和図書館がある庄和支所の2階学習室で開いております。来年には、5年目になります。県内には30年以上の読書会もあると聞き、感心しました。

初回は2016年4月、ちょうど、明治維新150年を迎えるときでした。そこで、「歴史の転換点、幕末・明治を見直そう」と、庄和図書館の所蔵資料である『日本絶賛語録』の読書感想からはじめたという、特異なスタートを切りました。

その年はメンバーの愛読書を中心に、感想を交わしました。翌年は、歴史書、ノーベル文学賞を受賞したカズオ・イシグロ作品、推理本などに分野を広げました。

2018年から、県立図書館の団体貸出制度の利用をはじめ、話



会員それぞれ、個性的な読み方で読書を深める

題書を中心に共通図書を選んで読むスタイルとなりました。これでわかったのは、各人各様の読み方の千差万別ぶりです。自分の気づかない、思いもよらない感想が飛びかっつて、新鮮な驚きをたびたび経験します。また、Aさんならこう感じるに違いないと思つたのがよい意味ではずれたときや、登場人物の真理への肉迫！したとき、新解釈・名解釈などにふれたときには、大いに盛りあがります。

現在、本の選び方は、県立図書館の新購入本と在庫本の全リストから、全メンバーの投票で多い順に仮の希望を出して、貸出可能な本を定例会の日を受け取り、1か月各人が読んで、つぎの例会で感

想発表を行います。さきほど、読み方は各人各様といいましたが、趣味嗜好があわない作品にあつたときにも個性が表れます。ときには投げ出す、とにかくがんばって読む、斜め読みや、中抜きで読む、それでも残るモノがちゃんとなるのは、仲間がいるからできることだと思います。

メンバーは、悠遊不惑のシニア世代(？笑)ですが、それでも、メンバーの感想をまったく批判しないことをルールにしているのが、継続できており、この12月で45回目を迎えます。

今回、優良読書グループとの表彰を受けましたが、図書館職員の方のご協力に、深く感謝しています。これからも、笑いの絶えない会が続くよう、健康第一に、良書との出会いを求めたいと思います。

おはなしの会
「くれよん」

代表者 前田美恵子
長崎県雲仙市

〈推薦〉
長崎県読書推進運動協議会

地域の子どものためのキラキラした陣や笑顔が、私たちの元気の源です。

2000年3月、ある講座に参加した5〜6名で、「くれよん」(やわらかくひらがな)を結成し、いまでは会員も10名に増え、おかげさまで21回目を迎えました。

今回、全国優良読書グループ表彰をいただき、数々の思い出やお世話になったみなさまへの感謝の気持ちでいっぱいです。

会員のだけれもが、「気持ちちは、若いころと変わらんよ」と言いながら、今日もたくさんさんのキラキラ

を浴びてきました。

いま、考えてみると、子どもたちの笑顔や目の輝きと、おはなし会を終えた私たちの達成感が重なることが、活動継続の大きな力であり、また魅力のようです。

ただ、今年がいつもと違うのは、コロナ禍におけるできるかぎりの対策を講じながら、「いまこそ地域に笑顔を」という強い思いが加わっていることです。

私たちのモットーは、「無理をせず、細く長く継続すること・できることをできるときに、楽しんで」ということです。また、誇りに思うのは、助けあいの精神にあふれる「くれよん」であることです。

現在の主な活動は、おはなしフェスティバルのほか、町内3つの小学校の朝の読書タイム、学校開放教育週間と夏の平和集会への参加、また、市内ブックスタート、

コロナ前のおはなし会。いまはマスク越しでも笑顔は変わらず



図書館まつりや自治会集会、敬老会など、活動の機会が多くなり、範囲も広がってきました。

そんな中で、とくに苦勞して創った影絵の上演は、いつも、どこでも強い緊張感につつまれます。やつとの思いで完成した人形を実際に動かすとなると、さらにたいへんです。大胆に、細やかに、

本物のように。いざという場面では、たとえ自分の役割で精一杯であっても、暗闇の中でアイコンタクト。できるかぎりの助けあい精神を機能させます。

また、会員共通の思い出があります。『ジャックと豆の木』のエプロンシアターで、豆を落としてしまったとき、子どもたちが、我先にとかき集め手渡してくれたことです。子どもたちの、あの日の、あの真剣な目の輝きが忘れられません。

地域の風、風景、人が大好きな私たちは、感謝の気持ちを忘れず、これからも「くれよん」の歩みを一歩、また一歩と進めていきたいと思えます。

最後の頁を閉じた 違う私がいいた

2021 第75回 読書週間
10月27日〜11月9日



大阪国際児童文学振興財団 オンライン講座配信

テーマ、ジャンル別に 昨年に出版された子どもの本を紹介

一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団(IIICLO)では、現在、オンライン講座「2020年に出版された子どもの本から」を配信している。配信期間は12月15日まで。

講師はIIICLO絵括専門員の土居安子さん。「紙の本の魅力はなにか」「コロナやデジタル化など、この変化の時代に、子どもの本とおして私たちはなにを子ども

日本子どもの本研究会 全国大会開催へ

2日間、講演・講座・分科会を オンライン開催

一般社団法人 日本子どもの本研究会は、「第53回 日本子どもの本研究会 全国大会 未来をひらく子どもと本―これまでのありかたを見つめ、新たな一歩を―」を、11月6日(土)・7日(日)に、Zoomを利用してオンライン開催する。

6日は、安田菜津紀さん(フォトジャーナリスト)の記念講演(今なぜ、子どもたちの姿を撮り伝え

の読物」「中学生からの読物」「自然科学・社会科学の本の中から」の6つのジャンル別に紹介、解説し、現在の子どもの本の傾向を探る。対象は子どもの本に関心がある人。

講座の視聴には視聴料が必要。申し込み後は配信期間中、何回でも講座を視聴できる。また、視聴時には資料として、講座で紹介する図書300冊のリストを閲覧できる。

視聴の申し込みなど詳細はIIICLOホームページまで。

IIICLOホームページ http://www.iiclo.or.jp/

め」が予定されている。

参加には参加費と事前申し込みが必要。1日だけの参加もできる。申し込み締め切りは10月25日だが、定員(300名)に達し次第、締め切る。各プログラムごとに定員があるため、日本子どもの本研究会では早めの申し込みを勧めている。

申し込み方法、および、講座・分科会の詳細な内容は、日本子どもの本研究会ホームページで確認できる。

日本子どもの本研究会

ホームページ

https://www.jaschonken.com

事務局報告(8月)

- ☆3日 日本図書及株式会社全国優良読書グループ表彰協力依頼
☆6日 機関紙「読書推進運動」645号 入稿
☆10日 機関紙「読書推進運動」645号 専号
☆14日 「絵本ワールド in ふくしま 2021」に出席
☆16日 野間読書推進賞選考委員に9月13日(月)本選考会の案内を送付
☆17日 機関紙「読書推進運動」645号 出来
☆18日 第75回 読書週間ポスターデザイン決定
☆23日 野間読書推進賞 第1次選考事業委員より評価票を受け取り
☆23日 第75回 読書週間ポスター入稿
☆26日 野間読書推進賞 第1次選考事業委員会開催(オンライン)
☆31日 上野の森親子ブックフェスタ 2021 収支決算書出来、文化産業信用組合・広瀬専務理事、日本書籍出版協会・樋口専務理事に会計監査を依頼

編集部 & 事務局の ひ・と・こ・と

●巻頭言の成瀬さん、特集の平田さんより、この一年、お孫さんと本を楽しむ暮らしの中で発見したことが、おふたりの読書をさらに豊かにされている様子はいかが、子どもに本を手渡すことは、子どもの世界を広げ、生きる力を育むだけではなく、手渡した大人の世界も広げ、新たな力となるのだなと、つくづく思いました。

●これまでに会った、文庫や実演グループのみなさんもよ、「私たちは子どもからパワーをもらっているんです」とお話ししてくれました。そんなみなさんと共通しているのは、子ども読書を豊かにするために、子どもと子どもについて日々学び、楽しみ、研鑽を積まれていること。その積み重ねた力があつてこそ、文庫やおはなし会を子どもたちが心から楽しみ、輝く笑顔を送りてくれるからです。

●「子どもの読書は読書推進運動の根幹」というのには、子ども時代の読書が人生の基礎となるだけではなく、その子どもに関わった大人たちも成長するという意味もあります。これまで「こどもの読書週間」の趣旨書に、家庭における読書環境の整備の重要ポイントとして「幼児には父母が本を読んで聞かせてあげる」と掲げていますが、「あげる」ではなく「一緒に読む」に変えることを考える方がいいのかもしれない。●それについても、孫の力って大きいですね。さきほどの重要ポイントを変えるとき、「祖父母」も加えるのがいいかも? (伸)